

# 錫杖岳ピークハント・リベンジ

2009年8月29~30日

登山者：A・T、S・I(記) 写真提供A・T

概況；昨年の11月初めに、ピークハントを行ったが、積雪のため敗退。A Tさんは、今回がリベンジである。私は初めての訪問である。

## 8月29日

車にて早朝発。12時新穂高温泉着。

12時20分駐車場から蒲田川にかかる橋を渡り、クリヤ谷の笠ヶ岳登山道を登り始める。天気は曇り。強い日差しはないものの風もなく、湿度も高く、しばらく歩くとどっと汗が噴き出す。クリヤ谷の水音が次第に大きくなり、やがて左岸側へ渡ると広葉樹林の中を登るようになる。

やがて笠ヶ岳登山道と別れ、谷に降りていくとそこが錫杖沢との出会いである。13時49分であるが、今日の行程はここまで、クリヤ谷の右岸側へ渡ると川沿いに快適なテント場が2面あり、早速テントを張る。仲間5人で有り余る時間を山の話をしながら過ごす。私はこのときが一番好きである。山の経験の少ない私にとって仲間から聞く話は、すべて新鮮で楽しくもあり勉強にもなる。やがて5人の話も尽き、19時に就寝。背中やお尻に食い込む石の感触や大きな川の水音も次第に遠のいていく。

## 8月30日

登攀チームは夜が明けるとともに出発して行った。A Tさんと私は、もう少し余裕をもって6時に出発。天気は今日も曇り、風もなく湿度も高そうだ。沢に沿って登山道もあるそうだが、せっかくであるので沢をつめて行く。30分も歩くと右岸側に岩屋がありテントが2張はあってあった。さらに登っていくと周りは笹原になり、谷の分岐に出た。沢の少ない水量はここで全く地面に潜ってしまった。

左側の水のない水路に沿ってつめて行くと、8時にやっと稜線に出た。そこに赤いリボンを巻いた枯れ木がある。これが目印らしく、そこを右にルートをとると笹原は針葉樹林に変わり、枝に巻いたリボンとかすかに残る踏み跡を頼りに、ツガの枝を掴みながらカラマツやスギの枝を乗り越えたり潜ったり、苦労しながら頂上を目指し進んでいく。

やがて周りが急に明るくなった。岩峰の頂上である。明るくなったといっても周りは霧に包まれており、見えるのは北側の岩峰が水墨画のようにかすかに浮かんでいるだけであり、展望はまったくくきかない。足元を見るとロープを括りつけたピッケルが岩の割れ目に刺さっており(もっとも刺さっているといってもセメントでしっかりと固定してあったが)、ここがP3といわれる岩峰であることがわかる。

一休みし、9時にさらに奥に進むことにした。しかし、「百山会」という板が木にかかっているところから先は、険しい岩の崖と樹木に阻まれルート取りができない。うろろろしていると今度は自分のいる所がわからず同じ所をぐるぐる回りだした。これは危険だと思い、A Tさんと相談し先へ進むことは諦めてここから引き返すことにした。10時10分、P3の岩峰まで引き返し、登攀チームとトランシーバで連絡を取るため、1時間ほど休憩を取ることにした。

時々霧が晴れて、北側の岩峰や烏帽子岩がまるで天空の砦のように見え感動を覚える。しかし穂高連峰には雲がかかり稜線が見えず残念である。国土地理院の25000分の1の地形図を見ながら錫杖岳を特定しようとしたが、地図は岩の崖のマークばかりで現地と突合するのはなかなか難しい。結局目の前に見える岩峰を2168mの錫杖岳本峰と思い込むこととした。それにしてもまったくの静寂、霧が流れていく音すらも聞こえそうに思う。時間が止まった自然の中では気だるさだけが感じられ、烏帽子岩を登っているのであろう登攀者の怒鳴り声が時々霧の中から飛び出してくるが、放心した耳にはそれすらも鳥の鳴き声のように自然の一部として心地よく聞こえる。

やがて大きな霧の固まりがふたたび周りを包み込み、夢から覚めたわれわれは、11時に重い腰をあげ、霧に追われるように登ってきた道をゆっくりと引き返し始めた。

還暦を過ぎると身体の動きに切れがなくなり、いかにも年寄り臭いことが自分でもわかる。馬鹿にしていたストックが手放せなくなったし、持久力もなくなった。仲間迷惑をかけるうちに身を引く時期を見極めなければならないと思っている。

しかし、今回の山行もチームの皆さんのモチベーションをもらいながら終わることができ、新たな感動を得ることができた。感謝しているところである。おかげで今は、次回の山行も何とかついでに行けるのではないかとと思っている。



錫杖沢出合テント



出合から錫杖沢



岩小屋



二俣から左俣



P 4 岩峰、白ガレ上部を左上する  
いかにも怖そう・フィックスあり



主峰

P 2

錫杖岳南峰(P 3)にて



大木場ノ辻方面



主峰

P 2

烏帽子岩

前衛壁



烏帽子岩